

生活科・くすの木タイム

生活科・くすの木タイム部 飯塚 理志 関口 雄基
研究協力者 大島みずき 音山 若穂

Ⅰ 生活科・くすの木タイムにおける「教科本質的な学び」について

思いや願いの実現に向けて、自ら対象（周囲にある人・もの・ことや自分自身）と関わり、それらに対する自分なりの価値を見いだす学び

本校生活科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は、対象を自分にとっての大切さで見ながら、自分自身や自分の生活について考えることである。くすの木タイムでの見方・考え方は、対象に関わる広範な事象を多様な角度から俯瞰して見て、自己の生き方を考えることである。これらの見方・考え方を踏まえ、生活科・くすの木タイムにおける教科本質的な学びを、「思いや願いの実現に向けて、自ら対象と関わり、それらに対する自分なりの価値を見いだす学び」とした。

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。そのためには、上記の生活科・くすの木タイムにおける教科本質的な学びが欠かせない。生活科において、子どもは、対象との関わりについて思いや願いをもち、それを実現していく。その学びの中で、自分の取り組みたいこと（目的）を見付け、対象の価値を見いだしながら関わり続け、自分のできることを増やしたり、活動範囲を広げたりして成長していく。さらに、自分の成長とともに周囲とのつながりに深まりを感じ、自分自身の価値を実感しながら周囲とともに生活を豊かにしていく。また、くすの木タイムにおいて、人の役に立つことに関する思いや願いをもち、それを実現していく。その学びの中で、社会や自然が抱える諸問題から取り組むべきこと（課題）を見付け、物事の多様性を捉えながら、対象の価値を見だし、解決に向かっていく。さらに、解決し、社会貢献できた自分自身の価値を見だし、これからの社会や自然の一員として、周囲と協力して、自らの生き方を問い続けていく。つまり、生活科とくすの木タイムの学習において、周囲のものと自分自身の価値を見いだせた子どもは、実生活をよりよくするために、周囲へ自分から働きかけたり、実社会の問題に対して周囲とともに解決方法を問い続けたりすることになり、共によりよい生活を創造していくことができるようになる。

2 研究の方向

生活科・くすの木タイムにおける教科本質的な学びは「思いや願いの実現に向けて、自ら対象と関わり、それらに対する自分なりの価値を見いだす学び」である。生活科における他者は、「活動を共にする中で気付きをもらえる存在」である。生活科における教科本質的な学びにおいて、このような他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、対象と関わっていることの喜びや悩みを分かち合い、対象の価値を実感するという意味をもつ。生活科では、自他の関わり方を比べながら、自他の関わり方によさがあることに気付き、対象の価値を実感し、再度対象と関わっていく。したがって、生活科における「他者と協働する力」は、対象と関わっていることの喜びや悩みを分かち合うことに向けて発揮される。くすの木タイムにおける他者は、「協力して、共に考えを創造していく存在」である。くすの木タイムにおける教科本質的な学びにおいて、このような他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、対象への関わり方が互いに異なることに驚き、悩み、一緒に対象の価値を見極めるという意味をもつ。くすの木タイムでは、自他の関わり方を比べながら、関わり方が多様にあることに気付き、より対象の価値を見極め、再度対象と関わっていく。したがって、くすの木タイムにおける「他者と協働する力」は、対象を通して、社会や自然が抱える諸問題を解決することに向けて発揮される。

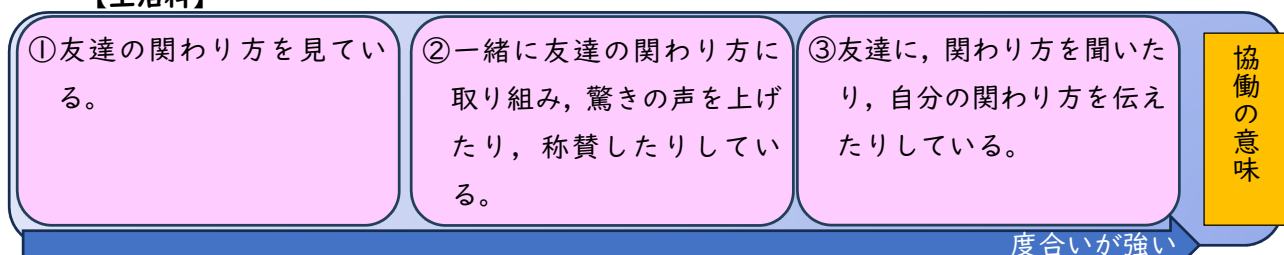
ここで、教科特性に着目すると、生活科では、対象と関わることに楽しさを感じるあまり、没頭してしまい、他者の関わり方に目を向けず、対象の価値を見いだすことが不十分になってしまう場面がある。このことから、子どもが、他者の関わり方を見て、互いによりよい関わり方を見付けたいという思いをもつことが必要になると考える。くすの木タイムでは、自信をもって自分の関わり方を他者に伝えることができるが、自らが見いだした関わり方が最良であると思いつくことで、他者の関わり方とその根拠に耳を傾けることなく、話を終えてしまい、対象の価値を見いだすことが不十分になってしまう場面がある。このことから、子どもが、自他の関わり方を大切にしたいという思いを高めることが必要になると考える。

そこで、子どもたちが、教科本質的な学びの中で、他者の関わり方を見て、互いによりよい関わり方を見付けたいという思いや、自他の関わり方を大切にしたいという思いをもてるような学びを実現し、「他者と協働する力」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

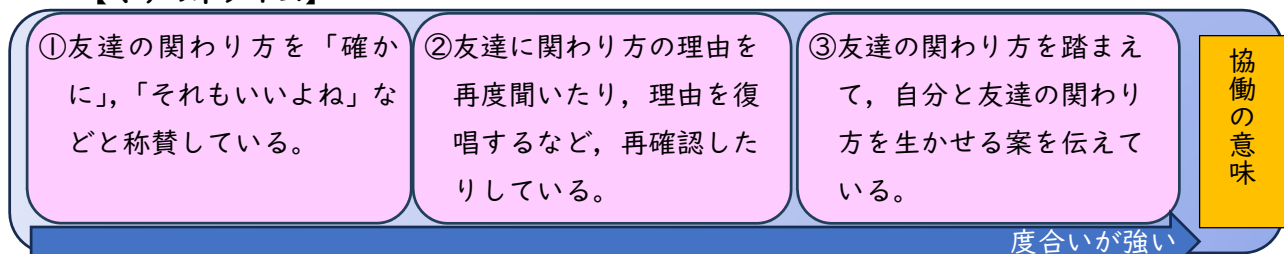
(1) 「他者と協働する力」が発揮された姿

【生活科】



①の友達の関わり方を見ることは、他者の関わり方のよさを見いだす行為であり、その後、自分自身の関わり方を見つめ直すことにつながる姿である。この姿には、友達をじっと見る姿や、覗き込む姿など、自分から友達に向かう姿が該当する。②の友達と一緒に対象と関わり、楽しむことは、友達の関わり方のよさに気づき、それを表出することとなる。表出された友達は、さらに自分の関わり方を見つめ直すことになる。③の友達と同じ目線で対象に関わり、自分の関わり方を伝えることは、互いの関わり方を知ることにつながり、互いに関わり方をよくしようとすることになる。これらのような、自他共に再度対象を見つめることは、対象の価値を見いだすこととなり、本質的な学びとなり得る。これらのことから、上記の姿は、協働する意味に迫る姿であると考えられる。

【くすの木タイム】

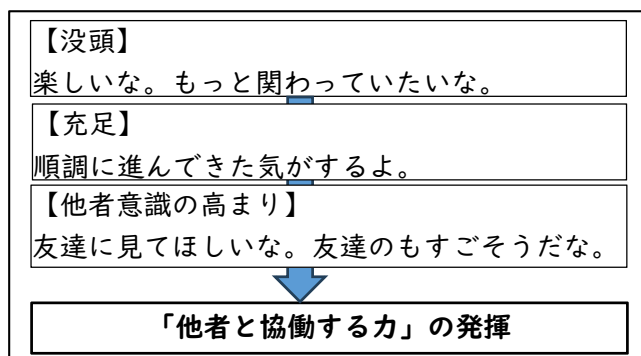


①の友達の関わり方を聞き、そのよさを認めることは、安易に自分の関わり方が最良だと思うことなく、友達の関わり方のよさに目を向ける姿である。②、③については、相手に直接働きかけ、関わり方の生かせる部分を模索している姿である。③については、必ずしも最良の解決方法である必要はないが、解決に向けた方法を見付けようとしている姿が該当する。これらのような、互いのよさを生かそうすることは、対象をより広い視野で見つめ、価値を見極めようすることとなり、本質的な学びとなり得る。これらのことから、上記の姿は、協働する意味に迫る姿であると考えられる。

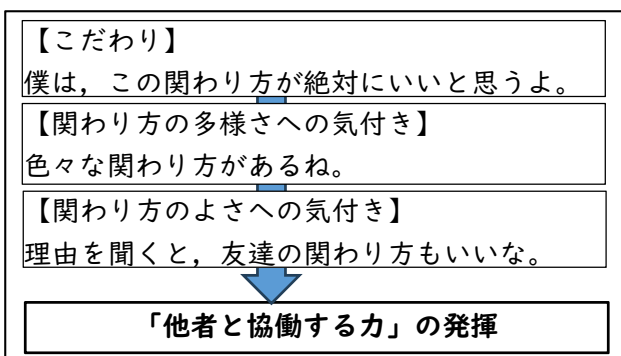
(2) 学びのプロセス

本校生活科・くすの木タイムの「他者と協働する力」が発揮される子どもの姿が現れるまでの「子どもの意識」を以下のように捉えた。

【生活科】



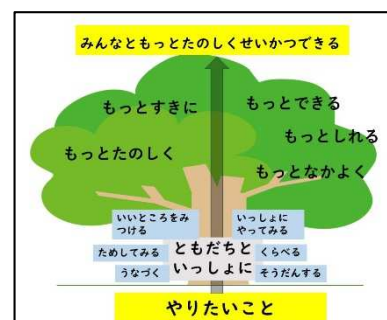
【くすの木タイム】



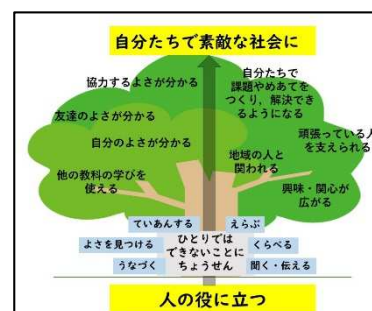
(3) 学びのデザイン

①教科本質的な学び

生活科・くすの木タイムにおける教科本質的な学びを踏まえ、生活科・くすの木タイムを学ぶよさについて、これまでの学習を振り返りながら共有する。子どもにとっての生活科を学ぶ意義を、みんなで楽しく生活できるようになることと捉えた。また、子どもにとってのくすの木タイムを学ぶ意義を人の役に立てるようになることと捉えた。これらの学ぶよさを実感するためには、友達と思いや願いを共有し、協力しながら思いや願いの実現に向かっていくという理念に基づいた学習方略を、子どもが身に付けている必要がある。特に、【であう】過程では、思いや願いを膨らませる際に、これらの学ぶよさを全体で話し合いながら共有する。さらに、【かかわる】過程では、学ぶよさから振り返りの観点として、できるようになったこと、がんばっていた友達、次に取り組みたいことの3つを提示し、振り返りをするように促す。そして、【まとめる・生かす】過程では、思いや願いが実現できた際に掲示した学ぶよさを用いて、解決の過程を教師が称賛することで、思いや願いの実現と友達の存在とが結び付き、友達と関わることの価値を実感できるようにする。



<図1 生活科を学ぶよさ>



<図2 くすの木タイムを学ぶよさ>

②プロセスを基にした学びのデザイン

【生活科】

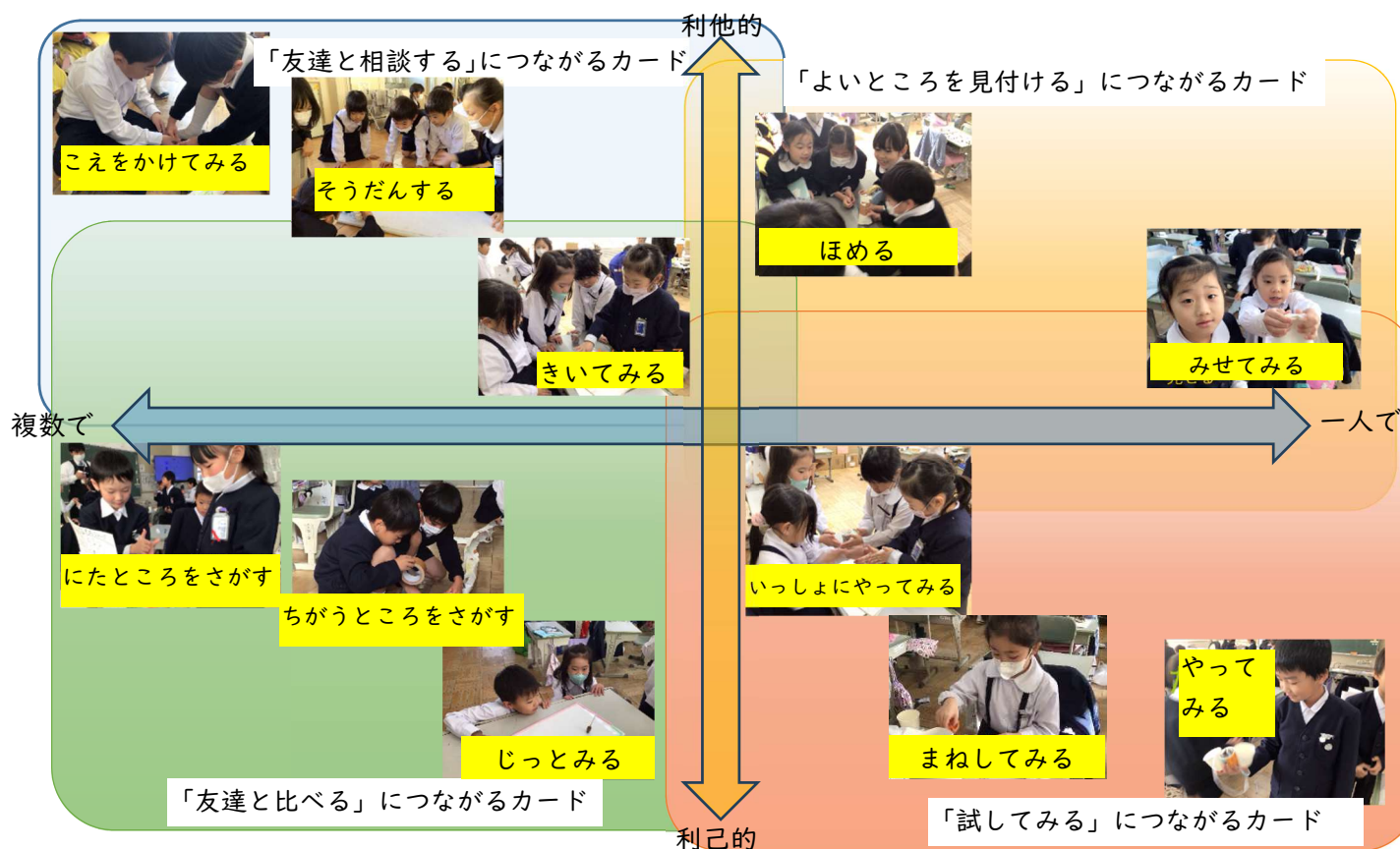
学びのプロセス	学びのデザイン
【没頭】 楽しいな。もっと関わっていたいな。 【充足】 いい感じにできてきた気がするよ。 【他者意識の高まり】 友達に見てほしいな。友達のもすごそうだな。 ↓ 「他者と協働する力」の発揮	思いや願いの実現に向けた学習計画作りとその活用 学び方選択カードの作成と教師の関わり

思いや願いの実現に向けた学習計画作りとその活用

子どもが、自己の充足を自覚し、他者への興味をもてるようになるためには、自分の思いや願いの実現状況に目を向け、見通しをもって学びを進めることが大切である。そこで、【であう】過程において、子どもたちと教師で、思いや願いの実現に向けた大まかな学習計画を作成する。単位時間の導入と終末でこの学習計画を教師と子どもで確認し、その都度、修正を加えられるようにする。また、教師は、毎時間子どもに、自分の進捗状況と学習計画とを照らし合わせて、取り組みたいことを問いかけることで、子どもが没頭する状態にあるのか、ある程度充足感を得て、他者へ向かう状態にあるのかを判断し、没頭する時間の確保ができる。これにより、子どもは、必要感をもって、友達と一緒に学ぶことができる。

学び方選択カードの作成と教師の関わり

子どもの他者意識を高めるためには、学び方が多数あることを想起し、そこから、自分の思いや願いの実現状況に合わせて、関わり方を自己決定し、友達と一緒に学習していることを自覚することが大切である。そこで、子どもにとっての学び方の指針となる学び方選択カードを作成する。これは、学級全体で共有した学ぶよさを基に、対象との関わり方の例について写真を用いて、カードの形に示したものである。カードは、ICTを用いて作成したり、紙面で作成したりすることが考えられる。また、子どもが選択したカードを常に見えるようにしておくことで、教師は、その学び方を行っていることを見取り、そのよさを子どもに価値付けることができる。価値付けられた子どもは、より友達と一緒に学ぼうとする思いが高まったり、近くの友達に、友達と一緒に学ぶよさを広げたりすることができる。なお、学び方選択カードの作成は、これまでの本校生活科における子どもたちの姿を一人で、複数で、また、利己的・利他的の視点で、以下のような4つのグループに分け、さらにグループの中で具体的な姿を想定し、作成する。それを発達段階や学習内容、子どもたちの学習状況を考慮しながら、教師が最適な物を選ぶように促していく。



<図3 「生活科を学ぶよさ」を基に具体化した学び方選択カード>

【具体例 1年「からっかぜ らんど」】

過程	時間	学習活動	指導上の留意点
であう	1	○校庭で冬探しをする。	○風を体全体で感じることができるように、風に向かって走ったり風に飛ばされている落ち葉を捕まえたりするゲームを設定する。
	1	○風で動くおもちゃの見本で遊び、感想やこれから取り組みたいことを話し合い、学習のめあてをつかむ。 学習のめあて 風で動くおもちゃを作ったり、遊びを考えたりして、「からっかぜランド」で友達と遊び、からっ風となかよくなるよう	○風で動くおもちゃを作って遊びたいという思いをもてるように、見本の風で動くおもちゃで遊ぶ時間を十分確保する。
かかわる	1	○作りたい風で動くおもちゃや遊びについて話し合い、からっ風と遊ぶ計画を立てる。	○風で動くおもちゃ作りの見通しをもてるように、見本の風で動くおもちゃ作り方の資料を提示する。
	2	○風で動くおもちゃを作ったり、身近な物を使って遊んだりする。	○風で動くおもちゃを作ったり、風を利用した遊びを考えられるように、作るおもちゃや遊びが同じ子ども同士で、遊びを試す場を設定する。
	1	○友達と風で動くおもちゃや考えた遊びで遊びながら紹介し合う。	○おもちゃがより風を受ける方法を見付けられるように、自分の風で動くおもちゃのよさや問題点を友達に伝え、改善策を聞く機会を設ける。
	2	○風で動くおもちゃを作り変えたり、遊びを考えたりしながら、グループで遊び方を話し合う。	○風で動くおもちゃや遊びの遊び方を友達に伝えることができるように、「遊び方のルール」「使い方」の視点を提示する。
	1	○グループのからっ風との遊び方を決め、準備をする。	○「からっかぜランド」に向けた、からっ風と楽しく遊べる遊び方のルールを決められるように、「遊ぶ場所」「笑顔になれる」という視点を提示する。
ま・といめかるす	1	○風で動くおもちゃやその遊び方を見直し、「からっかぜランド」の準備をする。	○風で動くおもちゃを作ったり遊んだりして工夫したことを自覚できるように、「おもちゃの工夫と遊び方」「楽しさ」の視点を示した学習プリントを用意する。
	2	○「からっかぜランド」で友達と遊び、気付いたことや楽しかったことを話し合い「振り返りカード」を書く。	○風で動くおもちゃで友達と遊ぶ楽しさを実感できるように、友達とおもちゃで遊ぶ時間を十分確保する。

からっかぜ らんど
がくしゅう けいかく

- ①おもちゃをつくる
- ②ためしにあそぶ
- ③なおす
- ④みんなであそぶ

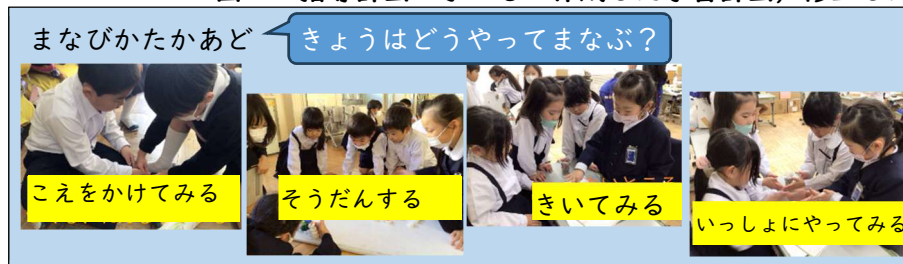
<作成した学習計画>

からっかぜ らんど
がくしゅう けいかく

- ①おもちゃをつくる
- ②おもちゃづくり
- ③ためしにあそぶ
- ④ともだちとそうだん
- ⑤なおす
- ⑥あそんでみる
- ⑦みんなであそぶ

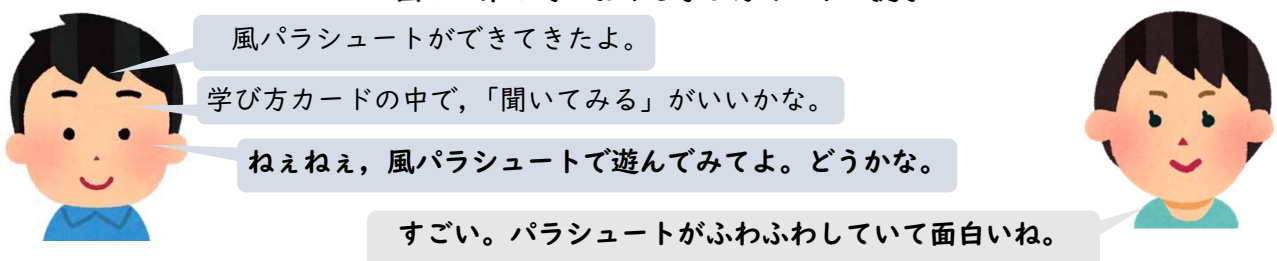
<修正後の計画>

<指導計画>
＜図4 指導計画と子どもで作成した学習計画、修正した学習計画＞



※学習計画で、④の時間であるため、「友達と相談する」を中心に、カードを抜粋し、提示する。

<図5 第6時における学び方カードの提示>



【くすの木タイム】

学びのプロセス	学びのデザイン
【こだわり】 この関わり方が絶対にいいと思うよ。	関わり方とその根拠を整理できる共有シート の活用
【関わり方の多様さへの気付き】 色々な関わり方があるね。	
【関わり方のよさへの気付き】 理由を聞くと友達の関わり方もいいな。	話し合う論点を焦点化するための教師の関わり
「他者と協働する力」の発揮	

関わり方とその根拠を可視化できる共有シートの用意

子どもが、関わり方が多様に存在し、それぞれに根拠があることに気付くためには、関わり方とその根拠を視覚的に捉えやすくしてあることが大切である。そこで、子どもたちが見いだした関わり方とその根拠を可視化できる共有シートを用意する。なお、高学年の子どもについては、班ごとに子どもが共有シートを使用したり、中学年では、学級全体で教師がシートを用いて、関わり方とその根拠を共有したりと、発達段階を考慮して、共有シートを活用できるようにする。

話し合う論点を焦点化するための教師の働きかけ

子どもが、友達の関わり方の根拠に目を向け、そのよさに気付くためには、多様な関わり方の中から、互いが納得できるような関わり方を見いだそうとする思いをもつことが大切である。そこで、話し合いの論点を焦点化するための教師の働きかけを行う。教師の働きかけの例は、以下のとおりである。

例	効果
話し合う目的の再確認	班または全体で話し合っている場面で、話し合う目的を再確認することで、自分たちの関わり方の中から、よりよい関わり方を選ぶ思考が生まれる。
デメリットを問いかける	自らが見いだした関わり方に不足している点があることに気付き、複数の関わり方を比べ、そのよさを取り入れようとする思考が生まれる。
大切にしたい視点を問いかける	全体で話し合っている場面で、大切にしたい視点を問いかけることで、自分が考えていなかった視点から、友達が関わり方を見いだしていたことに気付く。さらに、視点が定まるため、それに沿って関わり方を決めようとする思考が生まれる。

【具体例 3年 オープン！草木染め工房】

絹がいい



- 色が濃く、きれいに染まるから
- 草木染めって言えば、絹だから
- 専門家の方も使っているから

綿がいい



- ハンカチとしての触り心地がいいから
- 染まりにくいから、やりがいがあるから
- 専門家の方がやってないから

ローンがいい



- 安くて、何回も取り組めるから
- 染まりにくいから、やりがいがあるから
- 専門家の方がやってないから

※草木染めハンカチにふさわしい生地を選ぶ時間についての例を示す

- 草木染めらしさ
- 自分たちならではの
- 取り組む価値がある

<図6 選んだ生地とその根拠を共有するシートの例>

<図7 視点の例>



僕は絹がいいと思う。だって、色が濃く、きれいに染まるからね。



私は綿がいいと思う。触り心地がいいからね。

自分のもいいけど、相手の理由も分かるな。

友達は、どんな視点から、考えているのかな。どの視点を大切にしていこうかな。

「草木染めらしさ」の視点を大切にしているのだね。綿で絹と同じくらいきれいに染められるように挑戦していくのはどうかな。



「自分たちならではの」って視点で考えると、絹だと普通だから、あえて綿に挑戦するのもいいね。

4 成果と課題

本校生活科・くすの木タイムにおける問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

生活科では、学びのデザインにおいて「思いや願いの実現に向けた学習計画作りとその活用」と「学び方選択カードの作成と教師の関わり」を実践したことによって、対象との関わりに没頭して取り組む段階を十分に確保し、子どもが充足感を得るまでに至ったとともに、子どもが他者を求めるタイミングを見とったことにより、「友達の遊びも楽しそうだな」といった他者に対する意識が生まれ、一緒に活動し協働する姿に至ったと考える。

くすの木タイムでは、学びのデザインにおいて、「関わり方とその根拠を可視化できる共有シートの用意」と「話し合う論点を焦点化するための教師の働きかけ」を実践したことにより、互いの関わり方の違いとともに、それぞれの関わり方に根拠があることが明確化されたことにより、自他の関わり方を大切にしようという意識が生まれ、ともに新しい考えの創造に向けて話し合う姿が見られた。

○課題

生活科では、「思いや願いの実現に向けた学習計画作りとその活用」を行ったが、一人一人の子どもの思いを学習計画へ反映させることが不十分であった。そのため、単位時間の中で、活動への見通しをもてない姿が見られた。学習計画表を全体のみでなく、グループ単位のものも作成するなど、自分の学びを自覚し、より目的をもって友達に向かうことを促していく必要がある。

くすの木タイムでは、「関わり方とその根拠を可視化できる共有シートの用意」を行ったが、発達段階により、どこまで子どもに委ねるかといった部分を明確にする必要があった。また、共有シートから漏れてしまう考えが出ることもあり、自分の考えでなくなったため、話し合いに参加できない姿が見られた。そのような子どもは必然的に「他者と協働する力」を発揮した姿は現れなかった。よって、共有シートへの一人一人の考えの反映の仕方を検討する必要があると考えられる。

【参考文献】

- ・須本良夫【編著】(2018)『生活科で子どもは何を学ぶかーキーワードはカリキュラムマネジメントー』, 東洋出版社.
- ・中山芳一【著】(2023)『教師のための「非認知能力」の育て方』, 明治図書.
- ・小川雅裕【著】(2019)『授業のビジョン』, 東洋館出版社.